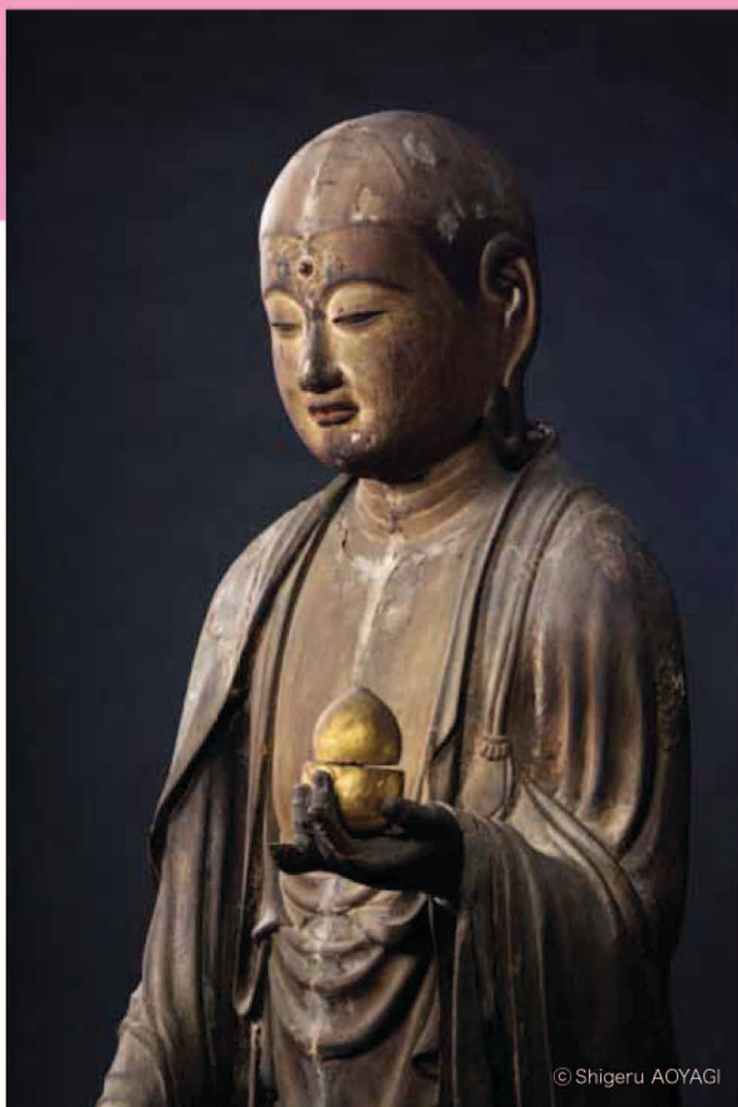


# 十日市の市神さん

## 安養寺の鼻採地蔵（市指定文化財）



木造地蔵菩薩立像

© Shigeru AOYAGI

十日市場の県道から、やや奥まったところにある安養寺（あんようじ）。ご本尊の地蔵菩薩像は、今から700年以上前（鎌倉時代後半）に造られたといわれる木造のお地藏様です。

ある時、田植<sup>産</sup>え前の代かきの時、馬の鼻を取る人がいなくて困っていると、このお地藏様が、童子の姿に身をやつして現れて手伝ってくれたというエピソードから「鼻採（はなとり）地藏」と呼ばれ、農業を助けてくれる仏様として信仰を集めるほか、甲府盆地に春を告げる祭りとして例年2月の10・11日の両日に行われてきた「十日市（市指定文化財）」の市神様としても信仰されてきました。

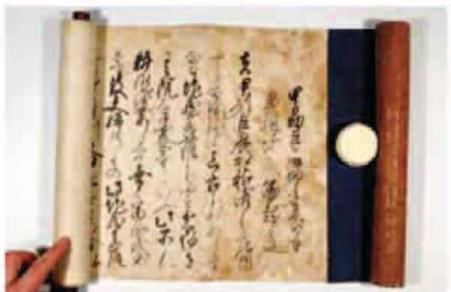
もともと昔の人々にとって「市」とは、日常から切り離された、神とつながる空間ととらえられていたようです。十日市も、実はこのお地藏様のもとで開かれた神聖な行事だったのです。市神様は年に一度、十日市の間だけご開帳されてきました。

『鼻採地蔵縁起』などによれば、十日市は、元々旧暦の正月（1月）10・12・14日、同じく7月の10・12・14日と、年6日開かれてきました。正月の十日市は春に控えた田植えの準備、7月の十日市はお盆を前に先祖の霊を迎える準備をするために開かれました。正月の十日市は現世の人々のため、7月の十日市はあの世の人々のために行われたといわれる所以（ゆえん）です。

注  
代かき……田植えのために、田に水を入れて土を砕いてかきならす作業。昔は、馬鍬（まんが）という農具を馬に引かせて行った。その馬の鼻緒をもって誘導することを「馬の鼻を取る」といった。



安養寺



鼻採地蔵縁起

鼻採地蔵のエピソードや十日市の歴史が記される。寛永17年（1640）に十日市場出身の尾張藩士、野呂瀬主税助が安養寺に奉納したものの。



十日市の賑わい



© Shigeru AOYAGI

木造地蔵菩薩立像（全体）

それが、いつの頃からか7月の十日市は廃（すた）れ、正月の十日市も旧暦の1月10日ではなく、この日に近い新暦の2月10日と11日両日の開催となりました。

その開催時期や、内容も変容していく十日市。今年には十日市祭典実行委員会が苦汁の選択として、開催の中止を決断しました。

しかし、そのような中であっても、安養寺のお地藏様は、人々の交流を見守る「市神地藏」として、またある時は農業を助けてくれる「鼻採地蔵」として、今後も変わらずに私たちの暮らしの中で、信仰を集めていくことでしょう。

少なくとも500年近い歴史を持つ十日市は、南アルプスを象徴する風土と歴史そのものともいえます。来年以降、十日市がよりよい形で続いていくよう願ってやみません。